桜花昇ぼるさん（中央）
（写真提供:株式会社OSK日本歌劇団）

らです。踊りも芝居も歌もやりたかった私は、背が高かったので普通の舞台向きではないと思い、子どもの頃から観ていたOSKで男役をしたいと思いました。高校卒業後はOSK付属の日本歌劇学校に2年間通い、20歳のとき、円形大劇場でラインダンスの初舞台を踏ませていただきました。

堀井　レビューを続けていくためには若い人たちを次々養成していく必要があると思いますが、現在はいかがでしょうか。

桜花　学校法人としての日本歌劇学校があったのは円形大劇場があった時代のことで、劇団が解散する数年前からは学生募集をしなくなっていました。しかし、未来へつなぐ新人を育てる必要があり、存続の会が立ち上がってすぐ研修所という形で研修生を募集しました。以降、毎年募集しています。

堀井　志願者は増えていますか。

桜花　少しずつですが、増えてきています。といっても研修生はまだ6～7人。試験に合格する人がそれぐらいなんです。でも、OSKで長年培われたことがこうして受け継がれていくのは、とてもありがたいことだと思っています。

古代ロマンを共有する

堀井　今年は平城遷都1300年を迎えて、奈良県で『平城遷都1300年祭』が開催されています。桜花さんはご出身が斑鳩町ということもあって、このイベントでもいろいろとご活躍だそうですね。具体的にはどのようなことをされていますか。

桜花　今年2月6日に奈良県の主催で、斑鳩ホール（斑鳩町）で聖徳太子を主人公としたミュージカルをやらせていただきました。おかげさまで客席は満席で、四天王寺や法隆寺を建立された聖徳太子の思いを伝えたいという私の夢が、これで叶えられました。また、平城遷都のイベントではないのですが、7月には上海万博の日本館のイベントステージで、奈良県代表としてミュージカルをやらせていただきます。

堀井　それはどんなお話しですか。

桜花　遣唐使・阿倍仲麻呂の人生をテーマにしたミュージカルです。阿倍仲麻呂は日中友好の祖として中国でも大変有名な人物で、唐の皇帝に重用され、中国で生涯を終えました。私はその阿倍仲麻呂を演じさせていただきます。

堀井　そうですか。阿倍仲麻呂は吉備真備（きびのまきび）らと一緒に遣唐使船で中国へ渡り、吉備真備は帰国して重要な役に就くのですが、阿倍仲麻呂は中国の官僚になって大出世しました。途中で帰国しようとしたのですが、船が難破してまた長安に戻り、中国で一生を終えました。さぞや生まれ故郷の奈良に帰りたかったことでしょう。「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山にいでし月かも」という望郷の歌がよく知られています。

桜花　それを歌詞に織り込んだ歌もご披露します。30分ほどの短いミュージカルですが、そこに阿倍仲麻呂の人生をぎゅっと凝縮しています。

堀井　それは面白そうですね。

桜花　じつは不思議なご縁で、私が子どもの頃、阿倍仲麻呂が生まれた村にある

脇田 修（わきたおさむ）氏

1931年、大阪市出身。京都大学文学部卒業後、大阪大学文学部教授を経て同名誉教授。専門は日本近世史。2001年より大阪歴史博物館館長。『近世大坂の経済と文化（1994年・人文書院）』、『日本近世都市史の研究（1994年・東京大学出版会）』、『大坂時代と秀吉（1999年・小学館）』など著書多数。文楽や狂言を愛し、60歳を過ぎて狂言師・茂山千之丞に師事する。